談話室（海外研究体験記）

とどまるということ—海外研究滞在記—

持 箸 晃*

76646 Bruchsal, Germany

(2021 年 2 月 16 日受理)

Stay in Germany

Akira MOCHIHASHI*

76646 Bruchsal, Germany

(Received February 16, 2021)

1. は じ め に

私は 2017 年 12 月より物理学研究者としてドイツ南西部に位置する大学に勤務しています。読者の皆様はご承知の通り、2020 年初めから始まった covid-19 の影響はドイツでも大変深刻で、本原稿を執筆している現在もロックダウン状態が継続しています。ドイツにおける covid-19 に関する詳細はドイツ国内にあるロベルト・コッホ研究所 (Robert Koch Institut) の公式ウェブサイト¹⁾に記載されていますのでご興味のある方はご参照下さい。ここでは、covid-19 問題の最中、日本を離れて暮らす毎日の生活の個人的な印象をざっくりばらんにご紹介したいと思います。

2. 在宅勤務とビデオ会議

他者との接触機会を避けるため、私の場合は 2020 年春から夏頃まで、また 11 月頃から現在に至るまで、出勤する必要のある場合を除き、在宅勤務が続いており、自宅から勤務先の大学の計算機にアクセスして作業をし、時にはビデオ会議に参加するという勤務スタイルで業務を行なっています。自宅オフィスで朝から昼食休憩まで勤務し、昼の休憩には自分で昼食を用意して摂り、休憩後は夕方まで勤務する毎日が続いています。勤務時間中はビデオ会議システムにアクセスしているため、誰か私に用件がある場合は必要に応じて呼び出され、引き続きビデオ会議が始まることもあります。勤務時間中は自宅の外に出る機会はなく、現在同居している犬の世話に数分玄関先に出る程度です。在宅勤務で鍵となるのは

気分転換で、今でこそ在宅勤務にかなり慣れましたが、当初は勤務時間と私生活の切り分けが上手くいかず苦勞しました。自宅にいと食事の支度などの家事をしなければならないのですが、どうやらこの家事が私生活と勤務時間との切り替えのための良いきっかけになっているようです。

上記のような在宅勤務や接触機会の回避にも関わらず、研究活動を従来通り維持するための様々な工夫と努力が払われていますが、その代表的なものが先に少し触れたビデオ会議の導入です。ビデオ会議は在宅勤務開始時期と同時に導入され、導入当初は皆さん不慣れで会議システムを上手く使えずに会議が滞ることがしばしばでしたが、徐々に慣れてきたのか今ではほとんどトラブルはありません。個人的な印象ですが、ビデオ会議システムの導入により会議数が増えたように思います。これはビデオ会議による予定調整のし易さや会議参加者に対する移動時間の負担軽減がその理由でしょう。また、直接対面する議論と比較してビデオ会議では微妙なニュアンスなどの情報が欠落しがちなため、会議の機会を増やすことでそうした欠落を補おうとしているのかも知れません。大学部署内だけでなく、主に欧州圏内の国際共同研究に関する打ち合わせやワークショップもビデオ会議が導入されており、現地に赴く時間が省けた打ち合わせの機会を容易に設けられるため大変便利なのですが、その一方で、現地に直接赴かないと得られない情報や知見があることもまた忘れてはならないと思います。私個人としては、こうした経験が covid-19 以降の勤務形態や共同研究の進め方に前向きに反映されることを期待しています。

3. 他者との距離とマスク

今の私の生活環境では、初対面同士の挨拶としては握手、また例えば親しい間柄の友人同士の再会時の挨拶としては軽い抱擁を交わす光景は珍しくありません。covid-19 問題発生後は、しかしながらこうした光景はほぼ全く見られなくなり、寧ろ他者との物理的距離を意図的に保つようになりました。例えば大型食料品店でよく見られますが、店内の床の所々に一定間隔で目印テープが貼ってあり、他者との距離を保つよう注意が促されており、場合によってはまるでチェスの駒のような動きをしつつ店内を移動せざるを得ないこともあります。互いに挨拶を交わす際には、今では軽くお辞儀をしたり、或いはマスク着用の上で肘同士を軽くぶつけ合う挨拶も見られます。皆さんそれぞれ他者との距離を保ちつつ近し

* E-mail : akira.mochihashi@kit.edu

い人間関係を保つよう工夫をしているようです。ビデオ会議の例と同様に、やむを得ず変更した意思疎通方法を何らかの仕方で補う努力が日常的に払われているように私には思えます。

日本では花粉症対策等で以前からマスクを着用して外出することに特段の違和感を感じませんが、covid-19以前では私の生活環境ではマスク着用者は皆無でした。ドイツにも花粉アレルギーはあり、実は私も毎年春先には花粉症に苦しめられています。covid-19問題発生後、ドイツでは施設や場所等によりマスク着用が義務付けられ、あっという間にマスク着用が普及しました。マスクを着用していると相手の表情が読めず、特に交渉や依頼をする際にはどのように話を進めて良いか迷うことがあります。このため、個人的には、自分ではあまり気づかないのですが、日常的な会話でもこれまで以上に言葉を尽くして会話を成立させているようです。これもまた先述したビデオ会議や挨拶と同様な事象なのでしょう。

4. 心からのお願い

covid-19問題が発生してから、大人数が同時に集う可能性のある催事はしばしば取りやめになっています。例えばドイツ国内の主要な街ではクリスマスの季節にはクリスマス市が開かれ、クリスマスツリーや煌びやかな飾り、或いは多くの屋台が出店し大変賑やかで楽しい雰囲気を楽しむことができ、観光客にも大変人気があると聞きます。しかし今年は多くの街でクリスマス市の開催が取りやめとなり、例年見られる心躍る風景を楽しむことができませんでした。ドイツは日本と比較して高緯度に位置しているため、冬の季節は日照時間が短くまた青空が見えることはあまりありません。個人的な印象としては、そんな暗く寒く厳しい冬を乗り越えるためにクリスマス市のような催事が催されているように思います。経済的な影響もさることながら、そこで暮らす人々の心的負担もかなり大きいように思います。

私が特に気がかりなのは、日本から例えばドイツへやって来た留学生の方々のことです。希望を抱いて故郷を離れ、言葉や文化の違いに戸惑いつつ自らの熱意と希望を持って遠い異国の地で生活する留学生の方々を僕は心から尊敬しています。しかしながら現在のcovid-19問題により、せっかくドイツの大学で学ぼうとしているのに

大学キャンパスに通えず自宅で講義を受けざるを得ず、そのため現地での交友関係を広げることも難しく、また気分転換としての外出や旅行或いは催事も満足に楽しむことができない。遠い異国の地で味わう孤独はどれ程辛いことでしょう。そこで読者の方々に厚かましくもお願いなのですが、今の困難な状況にも関わらず留学先に踏み止まり学術活動に専念しておられる留学生の方をもしもご存知でしたら、また、志半ばでやむを得ず留学を取りやめた・或いは一時的に取りやめた方々をご存知でしたら、どうか慰めと励ましの言葉をかけて差し上げて下さい。私は、現在の困難な状況にあっても尚、彼らのそうした熱意や希望は決して地に落ちることはないと感じています。

5. とどまるということ

私がドイツの大学に着任してから早いもので3年以上が経過しましたが、特に2020年のたった1年間に、大学の物理学研究者としての研究活動そして日常生活の仕方がこれ程まで大きく変化するとは予想だにしませんでした。私を取り巻く生活環境や社会が今後どうなるのかは全く分かりませんが、今後もしばらくここドイツの地に留まり、自身の研究活動を展開していく所存です。ドイツ社会に属する一個人として、この社会の動向をこれからも見届けたいと考えています。

ドイツ語では「留まる」という動詞はbleibenと言います。ここ最近、別れ際の挨拶で“Bleib gesund!”と言うのをよく耳にします。gesundは「健康な」と言う意味ですから、これは「健康でいて下さい・お身体大切に」と言う意味合いの親しい間柄での挨拶です。勤務・私生活環境共に、困難な状況だからこそ互いを思いやり豊かな人間関係を保ち構築することに努力が払われているように思います。現状ではまだ明確な出口は見えないのですが、読者の皆様のご健康とご活躍を祈念しつつ私の駄文を閉じたいと思います。

Bitte bleiben Sie gesund und in guten Aktivitäten für Ihre Forschung!

文 献

- 1) ロベルト・コッホ研究所：https://www.rki.de/DE/Home/homepage_node.html